

# テーマ別分類による辞書並びに第二言語教科書

—J.A. コメニウス著『開かれた言語の扉』の周辺—

松 岡 弘

## 1 はじめに

17世紀チェコの教育学者ヤン・アモス・コメンスキー (Jan Amos Komenský, ラテン名コメニウス、以下ではこれを用いる) はいくつかの言語教科書を書き著しているが、最初に刊行されたラテン語学習書 “Janua linguarum reserata” (『開かれた言語の扉』、初版は1631年) は、時をおかずして各国語の対訳版が出るなど、当時のヨーロッパで広く用いられると同時に、コメニウスのその後の言語教科書の原型ともなった。

この『開かれた言語の扉』は全体が100章に分かれ、1から1,000までの通し番号のついた文 (主に平叙文) からなっていて、そこに計8,000の名詞語彙が一度づつ用いられている、とされる。形態としては、現代の一般的な外国語教科書から文法説明、練習問題、ダイアログ、さらには新出語彙の対訳表などを取り除いた、本文によってのみ構成された教科書とすることができる。

『開かれた言語の扉』(以下では『扉』と略する) は内容の広がりからも、新出語彙の多さからも、盛り沢山の教科書である。現代の日本語教育で考えると、上級レベルの語彙数といってよい。こうした教科書が、実際にどのように用いられたかについては別に論じた (松岡, 2001) こともあり、本稿では触れない。本稿では、なにがこのような構成と内容、そして語彙を含む教科書の誕生を可能にしたのかを、コメニウスの周辺の出版物などをもとにして考察をめぐらすことにする。

まず最初に、『扉』の内容構成について概略を示しておこう。『扉』の100章に

はそれぞれの内容を表すタイトルがついている。表1がそれである。

表1 初版『開かれた言語の扉』の100項目のタイトル名

1 入扉	35 家畜飼育	69 学習施設
2 宇宙の生成	36 食肉製造	70 文法
3 原素	37 狩猟	71 弁証論
4 天空	38 漁撈	72 修辞学・作詩
5 火	39 捕鳥	73 計数学
6 気象	40 食品製造	74 幾何学
7 水	41 飲料製造	75 計量・計重
8 土	42 陸上運輸	76 光学・作図
9 岩石	43 水上運輸	77 音楽
10 鉱物	44 旅行	78 天文学
11 樹木・果実	45 商業	79 地理学
12 草類	46 衣服制作	80 歴史
13 灌木	47 衣服の種類	81 医学
14 動物・鳥類	48 什器製作者	82 倫理学
15 水棲動物	49 家屋・その部分	83 思慮
16 家畜	50 居室	84 節欲
17 野生動物	51 食堂	85 純潔
18 両棲動物・爬虫	52 寝室	86 中庸
19 昆虫	53 入浴・洗面	87 自足
20 人間	54 夫婦・婚姻	88 正義・流通の正義
21 身体外肢	55 子の出生	89 配分の正義
22 内蔵	56 親族	90 勇氣
23 身体の異常	57 家政	91 忍耐
24 疾病	58 都市	92 平常心
25 腫瘍・負傷	59 寺院	93 友愛・人間愛
26 外部感覚	60 教会	94 真摯
27 内部感覚	61 異教徒・ユダヤ教徒の迷信	95 学問の交流
28 精神	62 都市参事会	96 閑暇
29 意志・感情	63 裁判官	97 死・埋葬
30 工作技術一般	64 犯罪人・刑罰	98 神慮
31 園芸	65 国王の身分	99 天使
32 農耕	66 王国と版図	100 結論
33 製粉	67 講和と戦争	
34 製パン	68 学校と教育	

(鈴木秀男(1961)のなかの訳語に基づき、堀内守(1970)が一覧表にしたもの)

次に、具体的に何が書かれているかであるが、後に示す関連資料との比較のため、それらと内容を共通とする第20章の本文を、以下に例示する。

## XX 人間について

227. 生き物の頂点であり、この世の精髓としての人間は、泣き声とともに生まれる。
228. 生まれると母親または産婆がこれをおしめに包み、揺りかごに寝かせる。
229. 乳母は乳飲み子を抱えあげ抱き締めて乳を吸わせ、幼な子は自分で乳を吸う。
230. 2才の幼児は、歩くことを学び、おもちゃで遊びながら片言を話すようになると、すぐに揺りかごを出て歩行器を使うことになる。
231. 少年（14歳前の子供）は成長とともに声変わりをし、大人っぽくなる。
232. 14歳を越えると若者と呼ばれ、成人すると、青年（大人）と呼ばれる。
233. 壮年は熟年へと向かい、老年にはしわと白髪が加わる。
234. 女は、歯抜けばあさんとなり、男は、腰の曲がったよぼよぼじいさんとなる。
235. このように、幼年時代は自らを知らず、少年時代は遊びに、青年時代は無駄なことに、壮年時代は苦勞のうちに過ごされ、老年時代はもとに戻る。
236. つまり、老人はもう一度子供になる。高齢者は子供のようになる。
237. 背の高さは、ほどほどが一番バランスがよい。
238. なぜなら、巨人は恐れられ、小男やこびとは嘲笑され、全ての人から馬鹿にされ、からかわれるからだ。
239. （巨人やこびとは）裸で、毛がない。
240. つまり、ファウヌスも、サチュルスも、スフィンクスも、そしてキメラもケルベリスも、みな作り話である。

（ここでは、Komenský（1805）中のラテン語文とそのドイツ語訳から、藤田訳（1991）を参考にして翻訳した。このラテン語の原文は第3節の表6に掲げた。本稿での『扉』は基本的に Komenský（1633）に従っている。Komenský

(1805)は、ほぼこれを踏襲している。)

この20章では、人の誕生から老年に至るまでの、主に肉体的、外形上の変化が年齢と年代にそって叙述されている。内容も文体も平易であるが、一読してわかるように、新しい語彙が次々と登場し、煩瑣の感は免れない。現代的感覚からすれば、標準的な言語教科書の文章というよりも、分野別に名詞を中心として語彙を整理・配分し、文章としてのまとまりをつけたものということができる。

実は上の文章は、むしろ穏当すぎるくらいの内容で、例えば、これに先立つ19章「虫について」では、各種の虫の名前が次々と列挙され、次に続く21章「肉体について、最初に外部器官について」では、顔の各部分とその名称とともに詳細に記述されていて、さながら無味乾燥な理科教科書の様相を呈する。勿論、こうしたものは言語教育には向かず、実際には用いられないだろうという意味ではないが、現代的センスからすると、『扉』は一般の言語教科書の範疇には納まり切れないものをもっている。

筆者のかねてからの素朴な疑問は、こうした構成、文章、語彙の選択・配列は『扉』をもってその嚆矢とするのか、コメニウスの独創・創案によるものかどうなのかということであった。『扉』が忽然と誕生したとは、どうしても考えにくい。そこで、コメニウスに先立って同じような内容と構成の言語教科書を構想した人間はいなかったか、コメニウスには言語教科書を作成するに当たり手元に参考とするものはなかったのか、さらには、コメニウスの生きた時代に彼の周辺にはどんな言語資料が存在したか、に思いをめぐらすことになったのである。

こうしたことは、チェコ国内はもとより世界規模で行なわれてきたコメニウス研究のなかではすでに検証済の問題で、研究歴の浅い筆者が知らなただけのことなのかもしれないが、今回、こうした素朴な疑問を自らの目で確かめるべく、当時の刊行物に直接に当たることにした。特に、今回取り上げることになる辞書や教材は、書名は知られていても、その具体的内容は少なくともコメニウスとの関連では紹介されてこなかったと判断されるので、本稿はその間隙を埋める役割を果たすことにもなるだろう。

筆者が今回の考察の対象としていることを、より直截に表現するならば、コメニウスは『開かれた言語の扉』を書くに際し、周辺に存在した既存の教科書なり辞書なりを参考にする、その内容やアイデアを取り入れる、さらには表現方法などで直接に、あるいは間接に影響を受けるといったことはなかったか、ということである。本全体の内容にかかわる思想的・理念的なものはここには原則として含まれない。筆者が問題とし、また問題とすることができるのは、語学教師にして教材作成者コメニウスの一側面であり、その具体的な作業に対しては、同じく現場の第二言語教師としての共通体験から若干の意見と思いをめぐらすことは許されるであろう。

まず最初に、コメニウス自身が『扉』の序において言及し、その意義を認めつつ同時に批判を加えたところの、『開かれた言語の扉』に20年も先だって出版された、もう一つの *Janua linguarum* (『言語の扉』) の存在を無視するわけにはいかないだろう。まずこの問題から入ることにする。

## 2 ウイリアム・ベイス (William Bathe) の『言語の扉』

コメニウスの『開かれた言語の扉』の成立、並びにその内容と形式を論ずる時、必ず引き合いに出されるのは、俗に「サラマンカのヤヌア (扉)」と呼ばれてきた言語教科書、*Janua linguarum* 『言語の扉』である。カラヴォラス (Caravolas, 2002) によると、今日では一方に言及することなしに他方を引用することはほとんど不可能になった、という (*Acta Comeniana* 15-16, p. 39)。このサラマンカの『言語の扉』は、1611年にスペインのサラマンカで著者を明示せずに刊行されたが、今では著者は、ウイリアム・ベイス (William Bathe, ラテン名 *Gulilmus Batheus Hibernus*) という、アイルランド出身のイエズス会士であることが確認されている。(以下では、「ベイスの『扉』」とよぶ)

両『言語の扉』の比較、ないしは影響関係の有無については、最近の論稿として、ミシュティノヴァー (Mištinová, 2000) とカラヴォラス (2002) があり、前者が二つの『扉』の構成・内容上の相違を、後者が二つの『扉』の成立過程とコメニウスがいつベイスの『扉』と出会ったかの事実関係の確定、並びにコメニ

ウスの『扉』がベイスの『扉』にどの程度負っているのかの検討を行なっている。筆者はベイスの『扉』未見のため、コメニウスの『扉』との内容の比較を自身では試みることができないので、上述の二つの論文の要点と二つの『扉』の比較対照を参考にし、その上で、後で行なう考察と関連する事柄を示すことにする。

まず、二つの『扉』の外形上の主な相違点・共通点は次のようである。

①ベイスの『扉』は12の章に分かれ、各章は100個の文からなり、各文には通し番号がついている。一方、コメニウスの『扉』は100の章に分かれ、各章は平均して10個の文(最大20個)で構成され、全体で1,000個の文からなる。一度だけ使用されることになる語彙は、ベイスでは5,300、コメニウスでは8,000である。

②どちらの『扉』も、各章はそれぞれのテーマによってまとめられ、そのテーマを表すタイトルがついている。ただ、ベイスの『扉』の後半の章のタイトルは、必ずしも全体の内容を表さなくなっているという(Mištinová, 2000)。

③どちらの『扉』も、最初の版が刊行されてから後も初版とは異なる形態の版が出ているが、基本的にはラテン語とその他の外国語が併記される、いわゆるバイリンガル形式の語学学習書である点で共通する。

カラヴォラス(2002)はまとめとして、コメニウスがベイスに負っているのは *Janua linguarum* (言語の扉) という本の表題、同じ語彙を繰り返して出さない原則、内容をテーマ別にして100項目に分けたということだけで、二つの『扉』の目標、対象、内容、方法は全く異なる、と結論づけている。そして、教育の内容をテーマ・カテゴリーによって2言語ないしは多言語で構成し提示することは、ベイスやコメニウスよりもはるか以前から知られ実践されてきたことだ、としている。

一方、ミシュティノヴァ(2000)は、コメニウスの『扉』がベイスの『扉』に影響されたかどうかよりも、両者の特徴または独自性の対比に力点をおいているが、その中で筆者にとって示唆する所が大きかったのは、ベイスの『扉』の最大の貢献として、短い文をバイリンガル形式で示すことにより辞書の中の語彙

と対話体教科書との間の構文的な真空地帯を埋めた、こうして個々の単語は、理解しやすく、覚えやすい文脈の中に置かれることになった、という指摘があることである (Acta Comeniana 14, p. 68). また、ミシュスティノヴァー (2000) は、バイリンガル形式がすでに16世紀に認められた原理で、ベイスやコメニウスに始まるものではないとしている。

この二人の指摘、すなわち、ベイスやコメニウスの以前から存在したとされるテーマ・カテゴリー原理による教材の構成と語彙の配置、そして辞書とダイアローグの間を埋めるものとしての文の位置付けは、次節における筆者の考察とも深く関係し、大変興味深い。だが、そのずっと以前から存在したというテーマ別分類と提示とは、具体的にどんなものなのか。そして、辞書とダイアローグの間 (ベイスの言葉では *Via media*) というが、そこでは辞書は具体的にどのようにかかわっていたのか。この点については、カラヴォラス (2002) とミシュスティノヴァー (2000) は何も述べていない。筆者は、二人がそれぞれの論文においては指摘するだけにとどまったテーマ別分類と辞書の問題に焦点を合わせることにしたい。

これは、コメニウス以前の時代と同時代に、コメニウスの地理的周辺においてどのような辞書が存在し、そこにおいて語彙はいかなる原理によって分類され配置されていたかという問題である。筆者は、コメニウスが間違いなく手にしたとするものを全て確認し、それらを包括的かつ実証的に研究するだけの能力と機会を欠いているが、幸いに今回、コメニウスが実際に参考としたとされるものについて、少なくとも1点には目を通すことができた。以下ではそれを切り口にして、コメニウスの周辺に存在していて、仮にコメニウスの目に入ったとしても矛盾はないだろうという、そのような刊行物にも範囲を広げ、その中から問題設定にかかわるものを取り上げて考察することにする。こうした作業がコメニウスの『扉』とどのようにつながるかは、推論をもまじえつつ第4節でまとめられるだろう。

### 3 コメニウスの時代の辞書

コメニウスの『扉』の出現に先立って、あるいは同じころに、コメニウスの母国チェコ（ボヘミアとモラビア）において、どのような辞書あるいは外国語学習教材が出版されていただろうか。この場合、コメニウスが利用することを前提とするならば、それはまずラテン語とチェコ語であり、そして当時のチェコの言語事情を考えれば、ドイツ語にかかわるものが考察の範囲に入ってくるであろう。

この点に関し最も必要な情報を提供してくれるのは、グリュック／スパーチロヴァー他編著の『15世紀より1918年に至るまでのボヘミア並びにモラビアにおけるドイツ語教科書』(Helmut Glück/Libuše Spáčilová, et al. “Deutsche Sprachbücher in Böhmen und Mähren vom 15. Jahrhundert bis 1918”, 2002) である。これは、題名にあるような15世紀以来の、チェコにおけるドイツ語学習のための言語教科書のみならず、チェコ人が利用することを前提とした辞書も網羅的に取り上げ、それぞれの形式や特徴を記した計499点のドイツ語教材・教科書、そして辞書の文献解題である。そのうち、15～17世紀の辞書は、ラテン語を核としてドイツ語やチェコ語の対訳がついた、ドイツ語学習のためといたしながら実質的にはラテン語を学ぶための辞書でもあった、といってよい。コメニウスの言語教科書も基本的にラテン語学習用であることを考えると、ここに取り上げられた辞書がコメニウスの周辺に存在したとしても、ありえないことではなく、検討に値するだろう。

この文献解題には、『扉』以前に出版されたとされる対訳語彙集・辞書として、最も古いもので1420年以後とされる語彙集から始まって、1616年刊行のものまで合計21点が挙げられている。これを語彙の配列方式でみると、アルファベット順が6種、テーマ別分類が13種、両方合わせ持つものが1種ある。単純に数の上から考えても、テーマ別の語彙分類がアルファベット順の配列方式の2倍である。このことからまず確認できることは、その時代の辞書や語彙集は近代から現代までの一般的な辞書の形式とは異なり、テーマ別分類、いわゆるシソーラスの形態をとるほうがより優勢かつ一般的であったということである。

これまでのところ筆者は、上に挙げられた21種全部に当たることはできていないが、直接に目を通すことのできたテーマ別分類の対訳辞書・語彙集のなかから、以下において、『扉』との関係において無視できないと思われるもの2点だけを取り出して考える。

3-1 ヴェレスラヴィーン著『チェコ語・ラテン語・ギリシャ語・ドイツ語4か国語語彙と表現の森』(Daniel Adam von Veleslavín, Sylva Quadrilinguis Vocabulorum Et Phrasium Bohemicae, Latinae, Graecae et Germanicae linguae. Prag, 1598)

カラヴォラス (2002, p. 54) の脚注には、ノヴァークの言として、コメニウスはその後レシュノの破壊によって原稿を焼失することになる Thesaurus linguae Bohemicae を執筆する過程で語彙集や辞書を用いており、そこから『扉』の語彙を選んだ、とあり、さらにコメニウス自身が、『チェコ語教授学』22章 (Komenský, 1986, p. 150) で具体的に3つの辞書の名を挙げている、とあるが、その一つがヴェレスラヴィーンのもの『4か国語語彙と表現の森』\* であると思われる。

\* J. Heinic (1988) によると、Daniel Adam von Veleslavín (1546-1599) は人文主義者、歴史家、出版人、ボヘミア兄弟団の支持者としても知られた同時代のプラハの著名人で、1578-99年の間には139点あるいはそれ以上の出版物を刊行している。それらはラテン語、チェコ語によるものの外に、15点の多言語出版物があり、これらはラテン語・ドイツ語を基にし、それにチェコ語訳を補う形式の語彙集または会話集であった、という。本稿で取り上げるものも、その中の一つであろう。

当時の語彙集・辞書の主流がテーマ別分類であったこと、コメニウス自身がソーラスすなわちテーマ別分類の辞書を編んでいたこと、『扉』もまたテーマ別分類による語学学習書であることを考え合わせると、当然のことながら当時のテーマ別分類辞書の実態に目を向けざるを得ない。その意味でも、また、コメニウスが参考にしたとしてその名が挙げられているこの辞書（以下『森』とする）の

内容は検討に値する。

『森』は、縦24cm・横19cm・幅8cm、総1,216頁の大型の分厚い辞書で、以下の3部構成をとる。すなわち、

第Ⅰ部は、チェコ語を見出し語としたアルファベット順配列の名詞語彙集。

第Ⅱ部は、アルファベット順配列の索引集で、ラテン語、チェコ語、ドイツ語の各部に分かれている。

第Ⅲ部は、テーマ別分類による名詞語彙集で、各テーマ(項目名)はラテン語で表され、各語彙はチェコ語-ラテン語-ギリシャ語-ドイツ語の順で並び、相互に対訳の関係になる。

### 3-2-1 『森』の第Ⅰ部と第Ⅱ部

コメニウスの『扉』以前に存在したものとしてグリュック/スパーチロヴァー他(2002)が取り上げた21種の中の、アルファベット順配列とテーマ別分類の両方を含むただ一つの辞書というわけであるが、実は、第Ⅰ部のアルファベット順配列の語彙集といえども、現代的な感覚での外国語辞書のそれではない。その特徴は、まず第Ⅰに、見出し語はチェコ語であるが、その同義語が併記され、続いてそれに対するラテン語が見出し語として立てられ、その同義語があれば併記され、場合によってはラテン語による解説が続き、次いでギリシャ語、ドイツ語の対訳が示される。そしてさらには、古典の中のラテン語の用例が何行にもわたって示される。そして、ラテン語に類義語があれば、それが新たに見出し語として立てられ、同じように繰り返されていく。

つまり、アルファベット順のチェコ語と外国語との対訳辞書という形式をとりながら、実は、ラテン語を核にした意味用法・類義語・同義語・表現辞典も兼ねているわけである。例として1523-1524頁(1頁をの左と右の段に分け、それぞれに通し番号を付している)の、学校関係を表す単語の一部を見てみよう。

(なお、ギリシャ語の部分は省略し、チェコ語とラテン語は現代語表記に改めた。下線は筆者によるもので、実線はチェコ語、点線はラテン語を示す。その他はドイツ語。( )はドイツ語からの和訳、[ ]は筆者の注)

<u>Škola/školný dům/Kolleg,</u>	<u>Školník/školní žák/školár/žák/Student/</u>
<u>Schola : Ludus literarius. Ludus :</u>	<u>Kterýž se věi a do školy chodj.</u>
<u>Gymnasium : Palaestra scholasti-</u>	<u>Scholasticus : Discipulus, učedník :</u>
<u>ca : Gymnasium scholasticum : Pe-</u>	<u>Qui discendi causa scholas freque-</u>
<u>dagogium.</u> [以下3行分, ギリシャ	<u>tať, [以下3行分, チェコ語とギリシャ語</u>
語]	による解説が入る]
Schul. (学校)	<u>condiscipulus, spoluučedník, qui cum</u>
<u>Škola vysoká, vide Kolleg.</u>	<u>alio versatur, discendi causa,</u> [チェコ語
<u>Škola nižší, menší, chatrnější.</u>	訳]
<u>Ludus literarius : Schola particula-</u>	Schuler/student/der da studiert,
<u>ris, trivialis seu inferior : Paedago-</u>	lehring/der lernens halben in de schul
<u>gium,</u> [以下1行分, ギリシャ語]	geht. (学ぶために学校へ行く学生/学童)
Kleine Schul/geringe, nidrige schul,	
Particularschul genant. (小学校/平	
民学校, 下級学校, 地方学校とも呼ば	
れる)	

第II部の索引は、チェコ語、ラテン語、ドイツ語の部に分かれ、これもアルファベット順である。しかしながら、ある単語を引くと、その語を含む連語、熟語、成句、慣用表現が並べられている。例えば、ドイツ語の部の Freund (友人)、Freundlich (友好的な/親切的な)、Freundlichkeit (親切) を引くと、それを含む表現が28も並んでいる。例を挙げると、次のようである。(一部を改めたが、原文の表記のままとした)

Freund 1168,1185	(友人)
Freundlich 272,276,614,615,662,855,1995,1173	(友好的な, 親切的な)
Freundlichkeit 22,276,661,732	(親切)
ohn Freundlichkei sein 664	(友好的でない)

gegé niemand sich Freundlich wissen	
zustellen 664	(誰にも友好的になれない)
sich Freundlich stellen 1066	(親切に応じる)
besonder Freund 1168	(特別な友)
gutter Freund 1168	(良き友)
zum Freunde machen 1173,1177	(友達にする)
fur seinen Freund halten 1061	(友人と思う)
ich bin sein sehr gutter Freund 1171	(私は彼の親友だ)
ich hatte ihn als meinen besten Freund 1171	(私は彼を親友と思う)

このように、索引が、慣用句と語句の使い方辞典の役割を果たしていることが分かる。そして、指定されたその頁、例えば、上の Freund (友達) の項1168頁をひらくと、そこには「友達」に当たるチェコ語「Uřitel」が見出し語として載っていて、そこでもラテン語「Amicus」、ドイツ語「Freund」の順に、連語、熟語、成句、慣用表現等が並んで示されることになる。

以上のことからわかるように、ヴェレスラヴィーンの『森』第Ⅰ部と第Ⅱ部においては語彙は、アルファベット順に配列される一方、語彙相互の意味の連関と、その語彙が実際に用いられる場合の句や文の型が提示される。つまり『森』は、それぞれの語彙を孤立的に扱うのではなく、パラディグマティックな面とシンタグマティックな面との両面から立体的に提示するのである。

### 3-2-2 『森』の第Ⅲ部

第Ⅲ部はテーマ別分類による名詞語彙である。子細に比べてはいないが、第Ⅰ部で取り上げられた語彙がここでテーマ・カテゴリーによって分類され、配列されている。

第1類～第4類と補遺に大別され、各類を構成する項目はその類内の通し番号を持ち、合計すると165項目となる。それぞれが例外なく「～について」というラテン語のタイトルを持つ。表2でそれを示した。なお、長いタイトルは代表す

表 2

この名詞語彙集で示された全事物の分類

第1類

- |               |            |
|---------------|------------|
| 1 神・聖霊        | 3 教会の任務・儀式 |
| 2 教会・寺院・教会の設備 | 4 信仰・教会の教え |

第2類

- |             |            |            |
|-------------|------------|------------|
| 1 自然        | 20 マメ科植物   | 39 特殊な疾病   |
| 2 場所、特に道    | 21 庭の植物    | 40 腫瘍      |
| 3 時         | 22 花冠草など   | 41 潰瘍      |
| 4 世界・天体・星座  | 23 葉草      | 42 先天性障害   |
| 5 原素・火・空気   | 24 ゴム      | 43 四足動物一般  |
| 6 水・液体      | 25 香辛料     | 44 飼育四足動物  |
| 7 大地        | 26 命あるもの   | 45 野生四足動物  |
| 8 鉱物        | 27 生み育てる能力 | 46 鳥一般     |
| 9 岩石・宝石     | 28 感覚能力    | 47 家禽      |
| 10 樹木一般     | 29 色       | 48 水鳥      |
| 11 栽培樹木     | 30 音と声     | 49 大型水鳥    |
| 12 栽培果樹     | 31 味と香り    | 50 野生の小鳥   |
| 13 庭園       | 32 触角      | 51 魚一般     |
| 14 森の樹木     | 33 運動能力    | 52 川魚      |
| 15 野生樹木の果実  | 34 動物、その各部 | 53 海の魚     |
| 16 果物       | 35 動物の共通部分 | 54 牡蠣      |
| 17 ばらとぶどうの木 | 36 動物の特殊部分 | 55 爬虫類・蛇   |
| 18 植物一般     | 37 分泌物     | 56 這う虫・昆虫  |
| 19 穀物       | 38 疾病一般    | 57 羽虫、特に蜜蜂 |

第3類

- |            |          |             |
|------------|----------|-------------|
| 1 人間・男女・世代 | 8 家族・親族  | 15 市参事会     |
| 2 理性・心     | 9 主人・使用人 | 16 裁判       |
| 3 道徳       | 10 結婚・婚姻 | 17 不正・犯罪    |
| 4 悪徳       | 11 出産    | 18 牢・刑罰     |
| 5 知性       | 12 国家    | 19 遺言・死亡・埋葬 |
| 6 無知       | 13 君主    |             |
| 7 情愛       | 14 市民    |             |

## 第4類

1	学校	27	ぶどう栽培	53	寝室
2	書物	28	牧畜・乳業	54	手工業者
3	算数	29	食事	55	鍛冶屋
4	基数	30	食糧	56	石工
5	分数	31	食べ物一般	57	大工
6	序数	32	食品各種	58	陶工
7	倍数	33	狩猟・捕鳥	59	冶金業
8	時間・日・月・年	34	漁業	60	鉱山業
9	重さ	35	製粉業	61	巻き揚げ機械
10	距離の計測	36	製パン業	62	水・空気を通す機械
11	液体の計測	37	肉屋・屠殺場	63	溶鉱炉の準備
12	固体の計測	38	料理人・調理器具	64	金属の溶解
13	貨幣	39	飲み物	65	金銭取り引き
14	測量	40	ワインケラー	66	商人
15	音楽・楽器	41	服職業	67	船舶
16	裁判に関する事から	42	羊毛・麻	68	船員
17	医者・薬	43	染め物	69	平和
18	芸術一般	44	織物	70	戦争・軍隊
19	外科	45	仕立て	71	武器・武器庫
20	理髪師	46	衣服・アクセサリー	72	役人
21	田舎・森・庭園	47	男の身なり	73	陣営・包囲
22	田舎の屋敷	48	女の身なり	74	戦線・戦闘
23	農夫・職人	49	皮革・靴	75	子供の遊び
24	畑・鋤	50	網職人	76	若者の遊び
25	耕作・道具	51	都市	77	馬乗り
26	騎手・馬	52	家・内部	78	醜業

## 補遺

1	海	4	半島	7	城
2	川と湖	5	山・森		
3	地方	6	人々		

る言葉につづめて翻訳した。

では次に、各項目のなかの具体的な記述形式と内容はどうなっているか。コミュニケーションの『扉』との比較を兼ねて、第3類「人間及び人間に関わる事物について」

表3

Kzlowěč, Homo, (ギリシャ語), Mensch			人間
Mužské, pohlaví, Mas, masculino, (ギリシャ語), Mansbild			男
Zenstské pohlaví, Mulier foemina, faemella, (ギリシャ語), Weib, weibsbild, frau			女
(この後はラテン語と和訳のみを示す)			
Mulier sterilis, infoecunda	不妊の女	Iuuenis	青年(大人)
Mulier foecunda	多産の女	Iuuentus	青年期
Mulier foeta, gravida,		Vir	男
praegnans uterum ferens	妊婦	Homuncio	小男
Foetus	受胎	Aetas virilis	壮年
Puer	子供	Senex, vetulus	老人
Puellus, puerulus, pusio	少年	Vetul, senecio	おいぼれ老人
Puella, virguncula, adolescentula	少女	Decrepitus senex, capularis senex,	
Pupa	少女	silicernium	よばよぼの老人
Lactans puer	乳児	Senectus, senecta aetas, effoeta,	
Puer anniculus	一才児	senilis	老齡期
Exposititius puer	捨て子	Virgo	乙女
Puer supposititius, subdititius	取り替え子	Virginitas	純潔
Posthumus	父の死後生まれた子	Panna, virgo desponsata	嫁入り前の乙女
Abortus, infans abortiuus	流産児	Nympha, nova nupta	新婚女性
Monstrum	異常児	Virago	女丈夫
Caeso	帝王切開で生まれた子	Virgo nubilis, matura	適齡期の女性
Infans puer	幼児	Mulier	女性
Infantia	幼兒期	Muliercula	女
Adolesncens	若者	Vxor, marita	妻
Adolescentulus	若い人	Anus vetula	老婦人
Adolescentia	青春期	Anicula	老女
Ephebus, puber	14才より上の若者	Mertrix, prostibulum, scortum	娼婦
Impuber	14才より下の若者	Filius nothus	私生児

1項「人間・男女・世代」の語彙を取り出してみると表3のようになる。形式的にはチェコ語-ラテン語-ギリシャ語-ドイツ語の順に並び、第1部よりはるかに簡略化され、全体的に単語レベルでの対訳語彙集となっている。

3-3 ハドリアヌス・ユニウス著『固有名詞を含む全ての事物に関するラテン語・チェコ語・ドイツ語3か国語の名詞語彙集』(Junius Hadrianus, *Nomenclator omnium rerum propria nomina tribus linguis, Latina, Boiémica et Germanica explicata continens*. Prag 1586.)

この辞書は、グリュック/スパーチロヴァー他(2002)の解説では、1567年にアントワープで刊行されたHadrianus Juniusの辞書にヴェレスラヴィーンがチェコ語訳を付したものとある。その意味では前項で検討したヴェレスラヴィーン(1598)とのつながりが当然予想されるが、現在の筆者にはそれを実証的に確認することはできないので、ここでは具体的な内容を示し、そうした予想が妥当なものかどうかを考えたいと思う。

ヴェレスラヴィーン(1598)は3部構成で、辞書としての記述が最も詳しい第I部は形の上ではアルファベット順配列をとっているが、このユニウス(1586)はテーマ別分類だけで構成されている。従ってこの辞書はヴェレスラヴィーン(1598)の第III部に相当するが、記述内容はそれよりもはるかに詳しい。テーマ項目数は合計89で、ヴェレスラヴィーン(1598)の第III部の項目数165の半数よりも若干多い程度である。前編と後編とに分かれている。

前項と同じように、各項目のラテン語のタイトル(テーマ)を表4に、それらの項目のなかから、コメニウスの『扉』20章とヴェレスラヴィーン(1598)の『森』第III部第3類1項に相当する名詞語彙がまとめられている「人間及び人間の身体の各部分について」から該当する全語彙を取り出して、表5で示す。前項と同じく、タイトルの長いものについては、その一部で代表させ、原文にある「～について」は翻訳を省略した。

表5の名詞語彙は、原文では筆頭の見出し語はラテン語とその同義語、次にその対訳としてのチェコ語とドイツ語が並ぶ。対訳だけでなく、さらに同義語や語

表 4

前編		
I 書物	XIV 衣服	漁業
II 人間・身体各部	法衣	狩猟
III 四足動物	男の服装	鍛冶
動物の名称	女の服装	医者
犬の名称	頭の部分	農民
IV 鳥	足などの部分	兵隊
鳥の名称	XV 色	XIX 軍事
V 魚の部分	XVI 家	兵隊
魚の名称	塙・家具	市民
VI 虫・昆虫	再び, 家	軍事用語
蛇	XVII 船	遊び
VII 食べ物	船の各部	建築
VIII 飲み物	船具	工作
IX デザート・果物	XVIII 各種家具・道具類	XX 教会の道具・設備
X 香料・香辛料	まず, 家庭用	XXI 数
XI 穀物・豆	食堂	数え方用語
XII 草類	台所	貨幣
XIII 樹木・果実	寝室	XXII 計量
木材・樹木の病気	女物	液体の計量
各種ばら	織物	固体の計量
樹木の名	靴	距離の計測
	塗料・製粉	XXIII 楽器
後編		
I 原素	IX 神・聖霊	船
II 時	X 尊厳・儀式	移動(乗り物)
III 大地・水・場所	神聖なことば	遊園地
IV 鉱物	XI 尊厳・儀式	娯楽
V 岩石	不敬なことば	醜業
VI 宝石	XII 技術・芸術のことば	XXIV 親族・婚姻関係語彙
VII 病気・症状・障害	工作・労働	
身体・感情の言葉	衣服	
VIII 薬	料理	
各種の味	農業	

表5

Homo	人間	Adolescens	若者
Homuncio	小人	Infans	幼児
Mas	男	Ephebus	14才より上の若者
Foemina	女	Impuber	14才より下の若者
Mulier foecunda	多産の女	Iuuenis	青年(大人)
Mulier sterilis	不妊の女	Senex	老人
Mulier feta	妊婦	Senecio	おいぼれ老人
Fetus	受胎・妊娠	Decrepitus	よぼよぼ、棺桶に片足
Puer	子供		つつこんだ老人
Puellus	子供・少年	Anus	老婦人
Puella	少女	Virgo	乙女
Puer abortiuus	流産児	Virgo nubilis	結婚適齢期の乙女
Monstrum	異常児	Virgo immatura	ひ弱な乙女
Puer lactens	乳児	Virgo desponsa	嫁入り前の乙女
Puer anniculus	一才児	Virgo exoleta	オールドミス
Puer expositus	捨て子	Virgo sororians	乳房のふくらんだ乙女
Puer subditus	取替え子	Nympha	新婚女性
Puer posthumus	父の死後生まれた子	Virago	女丈夫
Puer collythaneus	乳兄弟	Matrona	妻
Caeso	帝王切開で生まれた子	Meretrix	娼婦
Proculus	父親が遠方において生まれた子	Pellex	妾
Cordus	時間をかけて生まれた子	Concubina	姦婦
Lucius	朝生まれた子	Puerpera	産婦
Opiter	死んだ父に代わって祖父が後見人になっている子供	Obstetrix	産婆
Agrippa	逆子	Nutrix	乳母
Ancus	肘が曲ったままの子	Nutricius	養い親
		Alumnus	養い子

訳が添えられる場合もある。表には、ラテン語の見出し語の最初のもとその和訳を載せた。まずこれを、ヴェレスラヴィーンの表3と比べてみよう。

表5にあるのは、「人間及び人間の身体の各部について」から後半の身体の各部の語彙を除いた全語彙であるが、これは数の点でも内容の点でも、表3とほとんど重なり合う。このユニウスの辞書を発行したのがほかならぬヴェレスラヴィーンであり、ヴェレスラヴィーン(1598)の出版はその12年後であるから、

このユニウスの辞書(1586)をもとにしてヴェレスラヴィーンが語彙を選択したと考えても、不自然ではないだろう。

両者の違いを指摘するとすれば、まず第一に、並び方が同一ではない。さらにユニウスには、特に子供や女性についての特殊な語彙・表現が目立つが、ヴェレスラヴィーンにはない。しかし両者の一番大きな相違点は、各語彙についての記述量と記述内容である。ヴェレスラヴィーンでは、各語の記述は基本的には第I部で行われ、第III部では、対訳の併記にとどまっている。それに対しユニウスの『ラテン語・チェコ語・ドイツ語3か国語の名詞語彙集』は、単なる対訳を示した語彙集ではなく、テーマ別分類の上に、さらに同義語と意味解説を含む大変包括的かつ詳細なものである。ユニウス(1586)はコメニウスが挙げたとされる3冊には含まれないため、これをコメニウスが参考にしたということをごここで断定することはできないが、ヴェレスラヴィーン(1598)とのつながりは明白であり、たとえ直接的でないにしても、『扉』に対する影響はあると考えてもよいのではなかろうか。

ここで、すでに第1節で和訳を示したコメニウスの『扉』第20章の原文を掲げる。下線部分は、ユニウス(表5)かヴェレスラヴィーン(表3)の両方、あるいは、そのいずれかで取り上げられている名詞語彙である。

表6

XX De Homine

227. Princeps animantium, Homo, mundi Epitome, vagiens nascitur.
228. Hunc post partum genitrix, aut obsterix fasciis involutum (fasciatum) in cunas reponit.
229. Nutrix vero alma, amplectens et amplexans alumnum suum uberibus lactat, pusio ipse lactet.
230. A cunabulis (ab incunabulis) venit ad serperastra, ubi infans bimulus incessum sibi format, et fari ac balbutire incipit (infit) crepita culis,

pupis et crepundiis ludens.

231. Impuberes, cum pubescunt, sonoram vocem alterant, hirsquitalluntque.
232. Ephebi dicuntur adolescentes, adulti, Juvenes.
233. Virilis aetas vergit ad provectam; Senilis rugas et canos adfert.
234. Annosa Vetus edentula fit, Senecio decrepitus (Silicernium).
235. Ita infantia seipsam ignorat; Pueritia ludicris transigitur, Juventus (aetas juvenilis) vanis, Virilitas laboriosis, Senectus ad priora relabatur.
236. Senes enim bis pueri; grandaevi repuerascunt.
237. Mediocris statura optime est proportionata.
238. Nam Gigas terriculo (terriculamento) est, Homuncio (homulus, homunculus) et Nanus (pumilio, pumilus, pygmaeus) deridiculo, illuditur, ac deridetur ab omnibus.
239. Nudus est, non hirsutus.
240. Fauni enim et Satyri, Sphinx etiam et Chimaera, cum Cerbero tripiti, commenta sunt.

(上の原文は、Janua linguarum reserata (1805) 記載のものである。Janua linguarum reserata (1633) とは相違する部分があるが(主に追加部分で)、翻訳文が Komenský (1805) に基づいているので、これを掲げた。)

#### 4 ここまでの考察

二つの辞書を取り上げ、それぞれについてテーマ別に分類された各項目のタイトル名(表2と表4)と、そのなかのテーマのひとつ「人間について」において掲げられた名詞語彙(表3と表5)を示し、それらとコメニウスの『扉』の100項目のタイトル名(表1)と「人間について」のなかの名詞語彙(表6の下線部分)とを比較できるようにしたが、この6つの表を眺め、比較対照することでどんなことがわかるかを、以下にまとめる。

まず、『扉』の「人間について」中の主要名詞が、ユニウスとヴェレスラヴィーンで取り上げられ、解説を施された名詞語彙群と一致することはすでに指摘した。

テーマ別分類とそのタイトル名についても、その多くは共通する。『扉』の方に「異教徒・ユダヤ教の迷信」があったり（項目61）、倫理学の項目が細分化されていたり（項目83～94）するという特徴はあるが、その他はそれほどの違いがない。『森』に、より限定された内容の名称が散見されるが、そこでは項目が165に細分化されているためでもあり（適切な和訳であるかどうかの訳語の問題もある）、『扉』に全く存在しない内容あるいはカテゴリーというわけではないと考える。ただし、二つの辞書の中の「人間について」の語彙が全て『扉』の「人間について」に取り込まれているわけではなく、逆に、『扉』の語彙が全てこの二つの辞書に由来すると言い切れるわけでもない。さらにまた、両辞書の中の語彙は名詞語彙だけであるから、それらを取り出しただけで『扉』の文章が完成することはあり得ない。

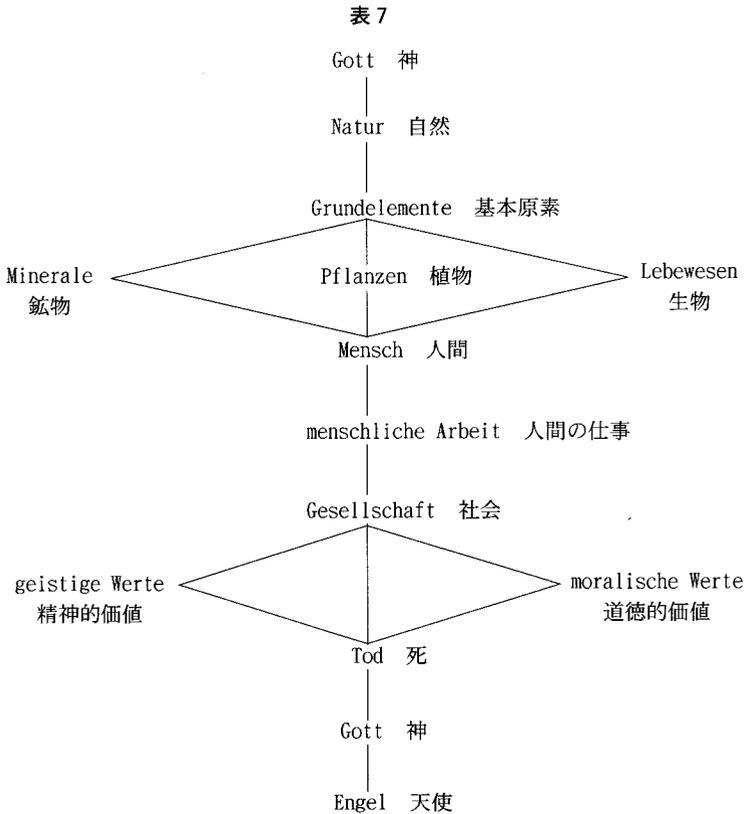
しかしながら、三者を並べてみて確実に言えることがある。それは言語教育用の文章作成に携わってきた者の個人的な経験に基づくもので、その科学的根拠を示すのは難しいが、このようにテーマ別に関連語彙・名詞が集められ、同義語や意味の解説があり、それらを参照することができたとするならば、『扉』の中の各章の文を仕上げるのはそれほどの苦勞を要しなかっただろう、ということである。いや、苦勞があるどころか、これらの語彙が助けとなり導きとなって、文章の作成は軽やかに進んだのではないかとも想像されるのである。

二つの辞書から『開かれた言語の扉』完成への道のりは、実は、それほど遠くはない。また、『扉』全体を形作ることになるテーマ群についても、ユニウスのそれが、ヴェレスラヴィーンの第Ⅲ部のそれが、そして、それらに先立つテーマ別分類による辞書編集の伝統が、『扉』の項目設定にごく自然な形で取り入れられていった、と考えておそらく決して無理はないだろう。

これに関連して問題となるのは、では、それぞれのテーマはどのような原理や思想で整理され配列されているか、ということである。特に、語彙の選択や語彙

のテーマ別分類ということにコメニウスの独自性が見出せないとするれば、配列の原理や全体構想の方に焦点が当てられ、強調されなければならないということになるだろう。

例えば、チェルヴェンカ(1970)では、『扉』を構成する主たる大テーマとその相互関係は、表7のようにまとめられる。



『扉』のテーマの流れがこのように整然とした見事な構成と順序になっているならば、二つの辞書のテーマの流れ・配列はどうであろうか。『扉』とは違い、理念はないのだろうか。

大まかに見て、同じ辞書であっても、ユニウスとヴェレスラヴィーンの間には違いがある。ユニウスでは、「神」の項は冒頭には来ない。また、ヴェレスラヴィーン『森』とコメニウスの『扉』との大きな違いは、『扉』が人間を植物界・動物界とのつながりと流れの中でとらえる一方、その精神的・道徳的価値はそれらから切り離しているのに対し、『森』は人間とそうした精神的・道徳的価値、さらには社会的価値とをひとくくりにし、動物界・植物界から分離していることである。このように、テーマのまとめ方に一定の原理を、さらにはその後の変更など（『扉』には第2版『扉』があり、テーマ構成等に大きく変化が生じている）に理念的または社会的な意義を探ろうとする試みは、これまでも行なわれてきた（鈴木秀勇（1960）、堀内守（1970）など）。

しかしながら本稿においては、全体を統一する思想や理念がどうであったかよりも、コメニウスが個々の語彙、個々のテーマを土台にして『扉』を書き上げていった、そのことの意味を考えたい。人は、コメニウスの言語教育関係の作品に何か特別な意味、ないしは深遠な思想を期待し、またそれが原動力となって教材が構想され、構成され、現実に執筆されたと思うだろう。もちろんそれも否定できないが、現実の執筆作業はそれとは逆に、極めて具体的な語彙群を眺めることから始まる。それは思想の営みからは遠く離れた作業のように見えるが、実はその反対で、人は最小単位である語句や語彙群に助けられ触発されて、思想を持つ全体＝テキストを作っていく、ということもあるのではないだろうか。これは、何よりもまず語学教師であったコメニウスにとってごく当たり前の作業であった。もし、コメニウスにこの語学教師としてのコメニウスが伴っていなければ、いかな大思想家といえど、8,000の異なる名詞語彙を1回だけ使うという語学書（それも対訳付きの）を独力で完成することは簡単ではなかったろう。こうした作業はすでに材料が揃っている限り、それほど超人的な作業でもないが、材料と状況が準備されていたこと、具体的にはテーマ別分類の辞書が手元にあったこと、つまりは、抽象的理念の前に具体的事物があったこと、そのことが『扉』の内容と完成にとって理屈ぬきに決定的なことではなかったかと、筆者には思われる。

筆者はここでは、語学教師の日々の営為のもつ意味を述べるにとどめ、チェル

ヴェンカ的なレベルでの比較考察には踏み込まないことにしたい。

最後に、二つの辞書との関連で述べるとすれば、『扉』は、こうも言えないだろうか。これは、「教材化された辞書」でもあると。辞書そのものは、そのままでは教育には使いにくい(人によっては、辞書を丸暗記して語学をマスターするが例外である)、語彙が文の形をとり、一定のテーマの下に連続すれば、語学のためのテキストとしての役割を果たすことが可能となる。こうした「教材化された辞書」としての『扉』の側面と後世への関連を次節で述べる。

### 5 教材化された「辞書」のその後

『扉』は「教材化された辞書」でもあると述べたが、コメニウスにあってこのことは、『扉』が『世界図絵』等に向かうにつれて、その性格を失なっていったようである。それでは、コメニウスの『扉』が体現していたような「辞書の教材化」の方向は、その後どうなったであろうか。

辞書が教材化されるには、ユニウスやヴェレスラヴィーンンの辞書がそうであったように、テーマ別分類をとっていることがその大きな動因となる。だが、コメニウス以後の辞書をグリュック/スパーチロヴァー他(2002)で追ってみると、その主たるものは、トムザ(Tomsa, 1791)、ターム(Thám, 1799)、ドブロフスキー(Dobrovský, 1821)、ヒメラ(Chmela, 1830)と、分厚いアルファベット順の総合的な対訳辞書であるか、または19世紀以後の特徴として専門分野別辞書のアルファベット順辞書へと細分化していくか、そのいずれかの方向をとる。したがって「辞書の教材化」の道はその後途絶えたとも言えるだろう。

その中にあって、ひとり異彩を放つ言語教材がある。まさに近代における「教材化された辞書」と呼んで相応しいような内容である。ここではそれをとりあげる。

J. V. シュテルツィンガー著『チェコ語・ドイツ語会話読本』

(Josef V. Sterzinger, *Kniha Česko-Německé Konversace, Deutsch-Böhmisches Konversationsbuch*. Prag, 1911)

総頁614頁、テーマ別分類で編成され、各頁にドイツ語文とチェコ語文とが左右対称に併記されていて、基本的にはドイツ語を学ぶチェコ人学習者のためとあるが、チェコ語を学ぶドイツ人のための会話読本でもある、というバイリンガル形式である。しかしこの本は中をのぞくと、現代の会話読本や会話中心の教科書のイメージとは掛け離れた内容となっている。まず、8つの章のタイトル名(大テーマ)は、次のようになっている。

I 旅行 II 人間同士の社会的交流 III 鉱物、天体と地球、自然、国、町、家、家の中 IV 家族 V 人間の身体 VI 市民社会と職業 VII 時間 VIII 光と火

各章はさらに下位の中テーマに、それらはまたさらに細かい小テーマに分かれていく。

例えば、IIIの中の、下位分類とそのテーマを見てみると、

- A 鉱物 1 天体と地球：星、太陽、天球、月、地球、大陸、水、川・小川・泉  
2 四季：春、夏、秋、冬、寒気、(以下、省略に従う)
- B 自然 畑：農民の仕事、牧草地、肥料、収穫前の夏、収穫、秋と冬に
- C 田舎 1 田舎で、森、庭・果樹園、花園、野菜畑、庭師、家畜・動物、鳥  
2 狩猟：禁猟期、狩猟準備、待ち場、追い出し猟、うさぎ、射る、猟が終わってから、狩猟の迷信、日曜猟師  
3 魚釣り：釣り道具、釣りのやり方  
4 昆虫：黄金虫、毛虫、蝶、蠅  
5 家畜：馬、ろば、牛、犬、猫、豚、山羊、羊  
6 家禽：鶏、雄鶏、雌鶏、鶯鳥、鳩、孔雀
- D 町 (省略に従う)
- E 家 (省略に従う)

本文を見ると、「会話読本」と銘打ってはいるものの主たる文章は叙述文で、

各項目の後半で部分的に会話文となり、対話形式となる。それにしても、このように整然と百科事典的内容に細分化されて本文が書きつづられる「会話読本」は、現代では想像しにくい。一例として「太陽」と「地球」というテーマの下にあるドイツ語の文例は、次のようである。

## 〔太陽〕

- 1 日の出 (Sonnenaufgang) 前は、薄明かり (Morgendämmerung) ・朝焼け (Morgenrote) だ。
- 2 夜明け (Tagesanbruch) に、太陽が地平線 (Horizonte) にあらわれる。太陽は昇り、夕方に地平線の下に隠れる。太陽が沈む。

## 〔地球〕

- 1 地球は太陽の周りを回転し、そして自ら (地軸の周りを um ihre Achse) 回転する。
- 2 わが国は、温帯 (gemäßigte Zone) に属する。

上の例でわかるように、シュテルツィンガーの会話読本は、大テーマの最初は「旅行」「人間同士の社会的交流」となっていて、一見、実用的な会話のための教材のように見えるが、実質的な中身は「テーマ別分類の辞書が教材化されたもの」と見ることができる。あるいは「叙述文、会話文の形をとった辞書」として、さらには、ミスチノヴァー (2000) がベイスについて述べた「辞書と教科書との中間の道を目指した教材」と位置付けることも可能である。その点でこれはまさしく、17世紀以来の形式と伝統を引き継ぐものであろう。

シュテルツィンガーが『扉』を意識していたかどうか、果たして現実にこれが教材になるのかといった疑問や詮索は、今回の本稿の目指すところではない。筆者はここでは、両者の類似性を指摘し、そこに個人を越えたレベルでのテーマ別分類辞書並びに教科書の、少なくともチェコにおける数世紀にわたる伝統を思うだけである。

そして、シュテルツィンガー (1866-1939) もまた、ヴェレスラヴィーン、トムザ、ターム、ドブロフスキーと同じく、外国語辞書の編集者であったことを指

摘しておかなければならない。大小のドイツ語-チェコ語辞典を作成しているが、そのうちの Enzyklopädisches deutsch-böhmisches Wörterbuch (1916) に至っては、全3巻、4,000頁というものである。まさに辞書作りのプロが手がけた言語教材であった。

ここでシュテルツィンガーの会話読本への筆者のささやかな感想を述べるならば、『扉』に始まった辞書の教材化の究極の姿がここにあるという点では興味この上ない作品であるが、しかしそこでは『扉』の持っていた教育的価値や思想的魅力は大きく失われているということであろうか。

## 6 おわりに

本稿の内容と主張を要約すれば、次のようになろう。

- 1) 15世紀以来のチェコにおける対訳付き辞書・語彙集には、大きくテーマ別分類とアルファベット順配列のものがあるが、コメニウスの『開かれた言語の扉』の刊行以前を考えると、テーマ別分類が優勢であった。
- 2) そのうちのコメニウスの周辺にあったとされるヴェレスラヴィーン著の辞書、並びにそれとのつながりの深いユニウス著の辞書で取り上げられたテーマと名詞語彙は、コメニウスの『扉』のテーマや語彙と大きく重なり、無関係ではあり得ない。
- 3) コメニウスの『扉』の周辺には、その執筆を促し、容易にし、完成させるだけの十分な参考資料と具体的な材料が整っていた。こうした周辺の出版物があったからこそ、また、コメニウスが語学教師であったからこそ『扉』は誕生したと考えたい。
- 4) 語学教育の視点から眺めると、『扉』は「辞書の教材化」、「教材化された辞書」という側面を持ち、この伝統は次の世紀にも継承されていった。

最後に、本稿で述べてきたことの大半は、筆者がチェコの各図書館、博物館に所蔵されている文献を直接に見、書き写すことができたことによって可能となった。

資料の閲覧に多大の労をとって下さった, チェコ国オロモーツのパラツキー大学スパーチロヴァー教授, オロモーツ古文書館前館長スパーチル博士, そしてオロモーツの学術図書館, プシェロフのコメニウス博物館, プラハの国立図書館, ブルノの州立図書館の関係職員の方々に心からの謝意を表する。

#### Dankesworte

Ich möchte den folgenden zuständigen Institutionen und den ihnen zugehörigen Leute meinen herzlichsten Dank aussprechen. Ohne ihre Hilfe und Freundlichkeit wäre die Vollendung dieser kleinen Abhandlung unmöglich, weil mich meiner Forschung hier meistens auf seltene Materialien in Bibliotheken und Museen in Tschechien stützen musste, z.B. die Nationalbibliothek in Prag, Landesbibliothek in Bruno, Komenský-Museum in Píerov und vor allem die Wissenschaftliche Bibliothek in Olomouc.

Ausserdem, möchte ich Prof. Libuše Spáčilová von der Palacký Universität und Dr. Vladimír Spáčil meinen aufrichtigsten Dank aussprechen. Sie haben für die Verwirklichung meines Studiums in Tschechien und für meine Besuche von den oben erwähnten Institutionen alle notwendige Vorbereitungen getroffen und mir wichtige Ratschläge bzgl. Veleslavín gegeben.

#### 参考文献

Junius, Hadrianus (1586), *Nomenclator omnium propria nomina tribus linguis, Latina, Boiémica et Germanica explicata continens. Ex Hadriano Iunio medico excerptus et pro usu scholarum Boiémicarum editus.* Daniel Adam Veleslavín, Prag.

Veleslavín, Daniel Adam von (1598): *Sylva Quadrilinguis Vocabulorum Et Phrasium Bohemicae, Latinae, Graecae et Germanicae linguae.* Prag.

Komenský, Jan Amos (1633): *Janua Linguarum Reserata Aurea, Lesno.*

Komenský, Jan Amos (1658): *Orbis Sensualium Pictus.* Nürnberg.

Tomsa, František Johann (1791), *Vollständiges Wörterbuch der böhmisch = deutsch und lateinischen Sprache.* Prag.

Thám, Karel Hynek (1799), *Neuestes ausführliches und vollständiges deutsch-*

- böhmisches synonymisch-pharaseologisches Nationallexikon oder Wörterbuch, Prag.
- Komenský, Jan Amos (1805), *Janua linguarum reserata aurea*, (herausgegeben von Karl Ignaz Thám), Prag.
- Dobrovský, Josef (1821), *Deutsch=Böhmisches Wörterbuch*, 2 Bde. Prag.
- Chmela, Joseph (1830), *Lateinisch-Böhmisch-Deutsches Wörterbuch nach J. J. Schellers Etymologischer Grundlage*, Königgrätz.
- Sterzinger, J. V. (1911), *Kniha Česko-Německé Konversace (Deutsch Böhmisches KonversationsBuch)*, Praha.
- Červenka, Jaromír (1970), *Die Idee des Sach- und Gesamtunterrichts in Komenskýs Janua linguarum reserata*. in: *Acta Comeniana* 2 (XXVI), Praha.
- Komenský, Jan Amos (1973), *Dilo Jana Amose Komenského 11*, Praha.
- Komenský, Jan Amos (1986), *Dilo Jana Amose Komenského 15/I*, Praha.
- Hejnic, J. (1988), *Daniel Adam von Veleslavín*, in: *Studien zum Humanismus in den böhmischen Ländern*. Koln-Wien.
- Mištinová, Anna (2000), *The Janua lingvarum reserata of Jan Amos Comenius and the Janua linguarum of William Bathe*, in: *Acta Comeniana* 14 (XXXVIII), Praha.
- Helmut Glück/Holger Klatte/Vladimír Spáčil/Libuše Spáčilová (2002), *Deutsche Sprachbücher in Böhmen und Mähren vom 15. Jahrhundert bis 1918. Eine kommentierte Bibliographie*, Berlin.
- Caravolas, Jean (2002): *On Bathe's and Comenius' Janua linguarum: The Errors, the Myths and the Facts*, in: *Acta Comeniana* 15-16 (XXXIX-XL), Praha.

鈴木秀勇 (1961) 「コメニウス教授学の方法—その社会史的規定のために—」

『一橋大学研究年報 社会学研究 3』

堀内守 (1970) 『コメニウス研究』, 福村出版

井ノ口淳三訳 (1988) 『世界図絵』, ミネルヴァ書房

藤田輝夫訳 (1991) 『開かれた言語の扉』 (私家版)

井ノ口淳三 (1998) 『コメニウス教育学の研究』, ミネルヴァ書房

松岡弘 (2001) 「コメニウスの言語教科書はどのように使われたか」 『言語文化』 第38巻, 一橋大学語学研究室

(一橋大学大学院社会学研究科教授)